（城西人文研究第37巻）

実例　地域コミュニティとボランティア
―小川町プロジェクト―

リッチー　ザイン・柳澤　智美

要約

This paper provides an overview of volunteer activities conducted by Josai University students in Ogawa Town, Saitama, in July 2023, detailing their implementation and outcomes. Community volunteerism contributes to enhancing locals' quality of life, fosters ideas for local development, encourages collaboration, and nurtures a sense of unity at the grassroots level.　Volunteering in local events also offers distinct educational experiences for students and provides them with insight into the community's culture and identity. The authors discuss the positive impact of student volunteerism activities on not only the local community but the students themselves.

キーワード：コミュニティ　地域　ボランティア　学生参加

はじめに

埼玉県の小川町で学生とともに活動したプロジェクトを紹介する。学生たちが地域コミュニティにボランティアとして参加し、その活動の中で、地域コミュニティの重要性とそこで直面している課題や問題を発見することで自らが行動し解決する力を身に着けていった。この活動には様々な効果があると考えている。

本稿では「コミュニティの定義」や「経済的効果」という観点から学生が地域コミュニティに参加する意義、地元の住民との交流において得られる効果などを改めて問い直す。学生の参加が地域に与える影響を考察し、日本の地域コミュニティが直面している諸課題に対して、実用的な問いを立て、解決策につながることを目指す。

1.コミュニティの定義

（1）コミュニティの由来

まず、「コミュニティ」という言葉の由来は、ラテン語の「communitas」である。「共通の、公共の、すべてまたは多くの人によって共有される」という意味を持つ（Etymology Dictionary, n.d.)であり、さらには「communitas」は「communis」からも派生している。「communis」は「共通の、公共の、一般的な、すべてまたは多くの人々によって共有される」という意味を持ち、ラテン語の接頭辞「con-」（「一緒に」を意味する）と「munis」（「奉

仕を行うこと」に関連する）の組み合わせから形成されている（Etymology Dictionary, n.d）。

（2）コミュニティを辞典から読み解く

辞典によると「コミュニティ」は以下のように定義されている。

・特定の地域に住む共通の興味を持つ人々の統一体、共通の特性や興味を持つ人々の集団が、より大きな社会の中で共に生活すること。
・共通の歴史や共通の社会的、経済的、政治的な利益を持つ人々または国家の集団や共通の方針によって結びついた集団など共通の場所で相互作用するさまざまな種類の個体（種）の集団 社会的な状態または条件。

（Merriam Webster Online, n.d.）

・共通の興味、社会集団、または国籍を持つ人々の集団が、単位として考えられる。

（Cambridge Dictionary Online, n.d.）

・共通の特性や興味を共有し、大きな社会の中で何らかの点で異なると感じられる、または感じる社会的、宗教的、職業的、またはその他の集団。

（Oxford English Dictionary n.d.）

・異なる人々やグループ間の友情、そして共通点を持つという感覚。

（Collins Dictionary Online, n.d.）

辞典からコミュニティの定義として共通することは、共通の目的をもった集団からなりたつことである。それは、興味や特性を持つ個体の集団、共通の場所で相互作用するさまざまな種類の個体の集団まで、幅広い社会構造を包含しているといえる。

（3）コミュニティの定義と先行研究の整理

コミュニティの概念は複雑で多面的であり、人間の社会関係と相互作用の多様性と豊かさを反映している（Phillips, & Pittman, 2015）。そして、地域コミュニティは通常、共通の場所に住む相互作用する人々のグループ（Chaskin, 1997）と定義されている。このグループは通常、共通の価値観に基づいて組織され、共有の地理的位置で社会的結束を持つ。これは一般的に、家族や世帯よりも大きな社会単位で行われている（Chaskin, 1997）。地域コミュニティの概念は地理的近接性だけでなく、共通の興味や価値観にも関連しており（Christenson &

Robinson1980)、環境を共有し、複数のつながりを持つ人々の集団となる（Kenny, 2007)。

一方、コミュニティ開発は、コミュニティメンバーが集まり、共通の問題に対する解決策を生み出すために共同で行動するプロセス（Christenson＆Robinson, 1980）と定義されている。通常よりも強固で弾力性のある地域コミュニティを築くことを目指している（Christenson＆Robinson, 1980）とともに、コミュニティ開発は、個人や集団が自分たちのコミュニティ内で変化をもたらすために必要なスキルを持つようにすることを目指す（Kenny, 2007）こととなる。コミュニティ開発は、(1）集団的な行動を取ること、(2）その行動の結果としてコミュニティが物理的、環境的、文化的、社会的、政治的、経済的などのあらゆる領域で改善すること（Phillips, & Pittman, 2015)が必要とされている。また「地域」とは、筑和（2008）がある種の「枠」あるいは「協会」と備えた概念であるとしており、一定の土地という「範域」を持った概念といえる。

しかし、村上（2001）は、「地域」という言葉に、人々が集合して行動することを示す「社会」という意味が重ね合わせて用いてしまうことが日常的に起きていると指摘している。このように、地域と社会の要素を合わせた用語として「コミュニティ」が使われることも多い[i]。また、カタカナの「コミュニティ」には、生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成単位として、地域性と各種の共通目標を持った、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団(米田 2003: 77-78)、などのある種の理想を内包した規範的な意味合いを持つものと理解されている側面もある（白石　2004：37）[ii]と指摘している。日本と欧米などの外国とコミュニティの概念は、地域社会・コミュニティに対する人々の態度や感情という両概念の定義の中核的な部分は共通しており、大きく異なる概念ではない（植村・笹尾, 2007）[iii]と述べられており、ことなる文化や歴史的な背景の中においてではあるが理解しあうことが可能といえる。

２．地域コミュニティとボランティア

（1）ボランティア活動と経済的効果

ボランティアは、日本において約 10 兆円（日本経済新聞, 2011 年 8 月 8 日）程度の経済効果があると試算されている。しかし、ボランティアに金銭価値を求めることは難しいと考えられている。まず活動内容や価値観も多様であり同時にボランティアの活動者は金銭的な収入を得ることを目的としていない。有償ボランティアなるものも存在しているが、一般的なアルバイト賃金よりも低いケースも多く本来の価値を正確に判定することは困難である。

大阪大学山内直人教授の試算によれば、2009 年に国内でボランティア活動に費やされた時間は 59 億時間とされ、それを専門業者に委託した場合の金額がおおよそ 10 兆円と計算されている。この数字は、日本の GDP のおよそ 2%に相当する。

例えば、東日本大震災の際には、ボランティアは延べ人数で 59 万人（全国社会福祉協議会, 2012 年）がなんらかの形でボランティアに参加していた。では、このようなボランティア活動は地域に対して経済効果を持たないのだろうか。例を挙げれば、ボランティアには給与のようなものは基本的に存在しない。道路清掃やがれき除去が無償で行われた場合、金銭の移動は発生しない。つまり、直接的な消費にはつながらず、GDP にも直接的な影響を与えていないことになる。

だが、地域における経済効果を検討するならば、ボランティア活動を日当などに換算することも可能である。この場合、本来であれば事業者に支払うべき対価を支払うことなく、他の用途に予算を回すことができたと考えるべきであろう。

ただし、この場合においても、口座上の現金の移動はないため、短期的には現地に対して直接的な影響はないといえるかもしれない。しかし、ボランティア活動者が現地入りするためには宿泊施設に滞在し、交通機関を利用し、さらに飲食も必要となる。これらを考慮すれば、地域やその周辺に対して直接的な資金循環が生じているといえる。つまり、ボランティア参加者が訪れることにより、本来支払うべき対価を節約できるだけでなく、短期的にも地域の直接的な消費に影響を及ぼしている。したがって、ボランティア活動には経済的効果があると考えられる。

（2）経済理論とボランティア

マクロ経済学の観点からボランティア活動を考察すると、ボランティア活動は、行政の活動が外部委託した際に発生する経済効果を伴うことなく、いわゆる供給行動に影響を与えないため、供給量は増えない。では、「自らの効用を最大化にする」という原則に基づいて行動するならば、ボランティアの活動は何を最大化しているのであろうか。

まず、ボランティアは自らの効用を最大化するために使うのはお金ではなく、時間であると考えられる。お金を払ってはいないが、働けば本来得られるはずの金額を仮に 1,000 円とした場合、ボランティアは報酬を受け取らずに時間を提供していることになり、実質的には時間を支払っているのと同様の状況となる。本来であれば、行政が支払うべき 1,000 円に対して、行政は時間という形で対価を提供しているボランティアから、1,000 円と同等の価値を受け取っていることになる。

次に、ボランティアを「投資」として見ることができる。例えば、ボランティア活動は資格試験の勉強をするのと同じように時間とお金をかけても、そこでしか得ることができない経験値を得る投資と考えることができる。このことが、就職や転職活動に活きることだと考え行動を起こす場合、自分のキャリアアップに必要な投資といえる（日経プラスワン,2011 年 8 月 6 日付）。

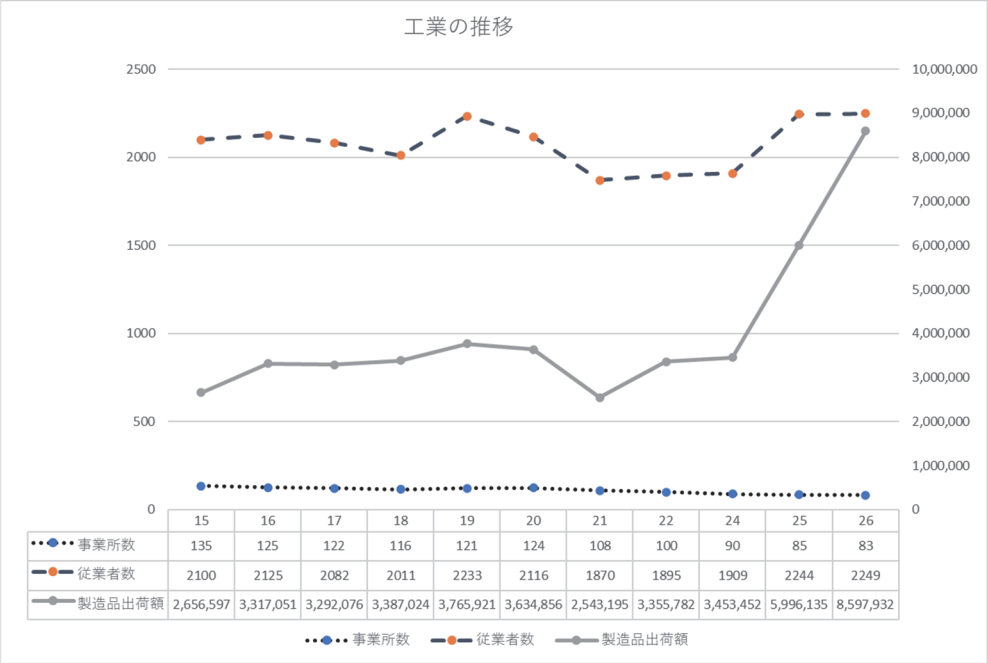
また、波及効果の観点からインターンシップと比較することもできるが、インターンシップは本来、職業体験を目的としているため、影響は参加した企業と個人の間にとどまる。一方、ボランティア活動は、社会全体への影響を及ぼす点で異なる。学生が地域コミュニティに参加することは、地域への貢献と同時に、地域経済への貢献にもつながるのである。

3．地域コミュニティにボランティアとして参加することの効果

（1）地域に受け入れられる学生プロジェクト

ゼミ生と共に小川町でプロジェクトを実施することを決定した。その発端は、学生たちと共に町を訪れ、地域のコミュニティでフィールドワークをしていた時のことである。私たちは、アクセサリー製造を営んでいた老齢夫婦の工場を訪れた。小川町にはかつて、さまざまな小さな家族経営のビジネスが存在していたが、高齢化、少子化、さらには過疎化という現状から、それらの存在は減少し続けている。「私たちには後継者がいません。私たちが亡くなったら、このビジネスも消えてしまいます」と発言をし、嘆いていた。

グラフ１　減少する事業者数



	15	16	17	18	19	20	21	22	24	25	26
事業所数	135	125	122	116	121	124	108	100	90	85	83
従業者数	2100	2125	2082	2011	2233	2116	1870	1895	1909	2244	2249
製造品出荷額	2,656,597	3,317,051	3,292,076	3,387,024	3,765,921	3,634,856	2,543,195	3,355,782	3,453,452	5,996,135	8,597,932

出所　統計おがわ平成 28 年度版より論者作成

このことがきっかけとなり、小川町を対象としたプロジェクトを開始した。学生は、観光の問題や、東京の中心から 1 時間でアクセスできるユニークな町への人々の移動を促す取り組みについて研究し、筆者は町の観光問題に関する研究会などに参加し、特に外国人観光客の数を増やす方法について議論し、多くの提案を行った。

2022 年に取り組んだプロジェクトの一つは、「おいでなせえ小川町」との観光ビジネスと連携して行ったもので、観光案内センターのために日本語のガイドブックを英語と中国語に翻訳する活動を行った。「おいでなせえ小川町」の担当者五十嵐氏は、小川町のユニークさを広く宣伝することで町を再活性化しようとしており、その店舗では小川町産の有機野菜、様々な手工芸品、地元産の日本酒、ビール、ワインなど、さまざまな商品を販売している。また、2023 年 7 月には、学部教員と共に「おいでなせえ小川町」で地元の七夕祭りを支援するため、3 日間にわたってボランティア活動を実施した。初日は、七夕祭りのために小川町名産の和紙を用いた装飾品を作成し、高齢の夫婦が店先に飾る竹飾りとして使用した。この活動は実際には 2022 年に始まり、学生たちが地元の祭りに関与し始めた取り組みである。地元の人々は家や店の前に竹飾りを作成し、通りを彩るが、高齢化が進んでいるため、竹飾りや祭りの準備作業を担うことが難しいケースが少なくない。

そのため、竹飾り作りなどのボランティア活動を開始した。この活動は岩田家（夫婦で経営している飲食店)、特に岩田夫人が「若い力」を喜んで受け入れてくれた。学生たちは伝統的な方法で作成された竹飾り作りの方法を学び、駅近くの公民館で作業を行い、完成後「いわたや」に展示した。

翌日、数人の学生は再び岩田屋を訪れ、願い事が記された竹ポールの設置や、「いわたや」が保管していた古い竹飾りの復元作業を行った。同時に、別の学生たちは「おいでなせえ小川町」で接客や店舗運営のサポートを行い、外国人観光客のための翻訳支援も行った。

岩田屋と五十嵐氏は、「学生たちの祭りの間のボランティア活動に感謝しており、若者が町を活気づけ、地元の文化と伝統を保存する重要性に気付き、地方の祭りや活動に興味を持ち、地域の文化を絶滅から守る重要性を学ぶことを願っている」とし、学生のボランティア活動に対して協力的かつ肯定的な評価を示している。

（2）学生ボランティアが地域コミュニティに果たす役割

上記活動のように、学生ボランティアを地域コミュニティで受け入れる利点は、地域内の人々や団体に対して、さまざまな部分への参加が可能ということである。当日だけのボランティアもあれば、団体に所属し、組織運営に関わるようなボランティア活動もあり、多様な形での参加方法が存在する。また、地域において既存のコミュニティ組織に学生が参加することにより、今まで気づかなかったことや、新たな視点を得ることができる。例えば、ボランティアが環境保護活動や持続可能なプロジェクトに関わることで、地域の自然環境を守る意義や、将来の世代にとって望ましい状態とは何かを改めて考える機会となる。今回の活動でも、小川町の和紙の美しさや強さに改めて気づいた学生たちの発言があった。住民にとっては当たり前の資源であった和紙が、実は非常に珍しく、貴重なものであることに気づくき

っかけとなったのである。こうした発見は、まさに学生の視点だからこそ可能であったといえる。そして、新たに、長年絶えることなく作られてきた小川和紙の代表作「細川紙」の技術を見直す機会にもなった。ボランティア活動を通して地域コミュニティに参加し、共通の目標や関心事に向けて協働することは、大学内では得難い、地域全体を巻き込んだ連帯感や共感力を養うことにつながる。また、今後、地域社会における社会的結束の重要性を学ぶこともできる。地域の祭りやイベントなどでボランティアとして参加したことで、イベントの成功を支える喜びや、学びを得ることができる。これにより、地域の文化やアイデンティティを知り、学生自身が SNS などを通じて広めていくなど、自らが考えて行動を起こすことができる。

今回の、「小川町の七夕まつり」に参加した学生は、 「普段は見ることのできない飾り付けの作り方から、配色にまで気を配る様々な装飾作業を体験することが出来ました。お手伝いをさせて頂いた「いわた屋」の女将さんも非常に喜んでいただき、とても嬉しかったです」というようなイベント当日に参加しなければ知ることができない伝統的な飾りつけの作り方や、その飾りつけがどのような意味をもっているかなどを学べた。また、「祭り 1 日目は 8 時に小川町へ到着し、祭り開始前から手伝いをしました。本番だけでなく、準備から手伝わせていただくことで、この祭に対する街の皆さんの熱意や、祭りの背景を見ることが出来ました」、「ボランティア活動の機会を生かして自分自身が成長することができました。さらに成長したいので、夏休みを無駄遣いしません」など、日本に学びに来た留学生にとっても、地域住民の祭りへの思いや、伝えたい文化や伝統に触れる貴重な体験となった。

現代社会では失われつつある文化や伝統が多い中、学生とともにこうした文化に共感し、支えていくことが求められている。地域コミュニティに参加し、共通の目標を共有することで、地域と新たな関係を築いていく可能性を提案したい。

まとめ

（1）地域とのつながりとは何か

地域コミュニティとボランティアは、互いに補完し合い、地域社会の健全な発展とともに、人々の生活の質を向上させる重要な要素である。現在、大学でもボランティアに関連する取り組みが増えている。「文科省調査では、キャリア教育を取り入れている大学は 2008 年度 674 大学であったが、2011 年度では 701 大学、ボランティア活動を取り入れた授業科目数は 2008 年度 315 大学であったが、2011 年度は 344 大学と報告されている。大学教育において自己形成支援を図ることの重要性を指摘しているが、その具体的なカリキュラムの一つとして、このような実践的、体験活動を導入することを明確にしているといえよう」[iv]とあるように多くの大学でキャリア教育が取り入れられており、なおかつそれらを実践するため

のボランティアを実践科目として取り入れられている。

このことは、学生に社会貢献の機会を提供し、責任感や自ら考える力を身につけさせ、実際の現場で社会問題を自ら確かめ、考え、動く力を身に着けることを目標としている。対人関係が得意な人がボランティアに向いていると思われがちであるが、決してそんなことはなく、話すのが苦手な人は聞き役に徹するようなボランティアも数多く存在している。また、伝統文化を継承するボランティア活動も極めて貴重である。大学と地域がパートナーシップを築き、地域との連携や協働を行う際、ボランティア活動は良好な関係を持続させるための重要な役割を果たすといえよう。

（2）今後の課題と目標

本研究はリッチー アーロン ザインの主催するプロジェクト型ゼミナール１および２において、小川町での実践的な学びを通して、「コミュニティ」という概念を問い直し、そこに

１社会への貢献、

２経済効果、

３大学と学生が参加することの利点、

４受け入れ側の利点

を再度検討したものである。

ボランティア活動を効果的に行うためには、受け入れ先と十分に話し合い、どこまで関与するか、何を望んでいるのかなど意思決定や互いの目標を同一にすることが必要になる。学生と大学教員が実際に地域の現場に入り、地域の住民と一緒になって課題や問題を一緒に話し合い、継続的に取り組んでいくことが求められる。地域の方向性や政策決定がより適切に行われることを可能にするためにも、今後、大学はどのような立場で協力できるか、また地域との協働を進めるためにどのような新たな展開を構築していくかが課題である。

地域コミュニティは、地域社会の基盤であり、人々の生活において必要な場を提供している。そのような場に学生が参加し、地域コミュニティの強化と支援に対して積極的に取り組むことで、学生にとっても地域の活性化や地域の人材育成に関わることが可能となる。自分一人が何をしても変わらないと考えるのではなく、自らの提案によって小さな変化が生まれるという体験を重ね、地域コミュニティにおけるボランティアの必要性を理解する機会を提供していきたい。(n.d.).

---

[i] 森重昌行（2011）「観光を通じた地域コミュニティの活性化の可能性」『観光創造研究』5,P1

[ii] 森重昌行（2011）「観光を通じた地域コミュニティの活性化の可能性」『観光創造研究』5,P2

[iii] 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三（2013）「コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発」『実験社会心理学研究』53(１), P23

[iv] 山崎 美貴子（2017）「大学におけるボランティアの重要性と意義について」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』11, P23

参考文献

外国文献

1 Cambridge Dictionary Online. (n.d.).Cambridge University Press. https://dictionary.cambridge.org

2 Chaskin, R.J. (1997). Perspectives on neighborhood and community: A review of the literature. The Social Service Review, 71(4), 521-547.

3 Christenson, J.A., & Robinson, J.W. (1980). Community development in perspective. Ames, AI: Iowa State University Press.

4 Collins Dictionary Online. (n.d.). https://www.collinsdictionary.com

5 Etymology Dictionary. (n.d.). https://www.etymonline.com/

6 Kenny, S & Connors, P. (2017). Developing communities for the future. Cengage Australia

7 Merriam-Webster. (n.d.). Merriam-Webster.com. https://www.merriam-webster.com(n.d.).

8 Oxford English Dictionary. (n.d.). Oxford English Dictionary. https://www.oed.com

9 Phillips, R., & Pittman, R. (2015). An introduction to community development (Second Edition.). Routledge.

日本語文献

１石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三（2013）「コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発」『実験社会心理学研究』53（１），22-29

２人工知能学会［編］・榎本 美香・伝 康晴（2023）「祭りの準備作業の変遷が地域コミュニティの絆に及ぼす影響」『人工知能学会　言語・音声理解と対話処理研究会』98, 43-48

３森重昌行（2011）「観光を通じた地域コミュニティの活性化の可能性」『観光創造研究 NO.5』

４山崎 美貴子（2017）「大学におけるボランティアの重要性と意義について」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』11,19-24

５和田 由起子（2023）「『地域共生社会の実現』に向けた地域コミュニティの再建 ： 世代間交流による地域社会のレジリエンスの強化」『日本私学教育研究所，日本私学教育研究所紀要』59, 97-100